

令和2年度 留萌管内社会教育主事会 の取り組みについて

令和2年度 研究テーマ 「自己肯定感・自己有用感って何？」

道社会教育主事会の令和2年度のサブテーマ

→「地域の未来を担う

自己肯定感・自己有用感の高い若年層の育成」

→そもそも、自己肯定感・自己有用感って何だろう？

→あまり使う言葉ではないし…

⇒自己肯定感・自己有用感を知ることから始めよう！！

①資料を持ち寄り、自己肯定感・ 自己有用感について話し合おう！！

当初：自己肯定感・自己有用感の低さ

→不登校につながっているのでは？

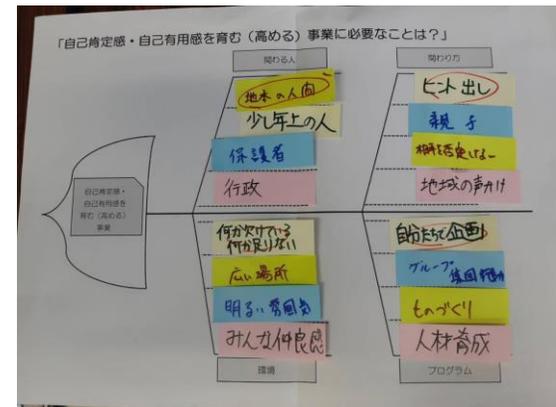
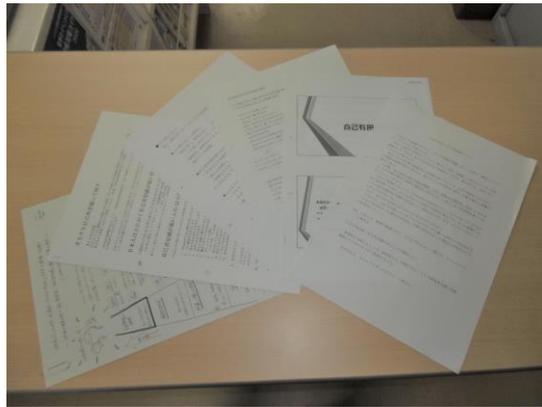
→管内における不登校の現状を知るべきでは？

→個人情報などの壁…

では：自己肯定感・自己有用感について話し合おう

⇒各自が情報収集&資料作成

研究協議 & 課題対応型学習活性化セミナー



研究協議

& 課題対応型学習活性化セミナー 感想

- ・自己肯定感や自己有用感という言葉の定義が自分の中でぼんやりとしており、それぞれが持ち寄った切り口の異なる発表によって、理解を深めることができた。
- ・社会教育事業の中には、自己肯定感を高める要素が少しずつちりばめられていると思う。中長期的な視点で意識しながら積み重ねていくのが大切だと感じた。
- ・社会教育として、ほめる機会、大切であるという存在意識を芽生えさせる事業が必要と感じた。

- 幼少期からの体験活動は豊かな感性を育ませ、「発見」という感動から好奇心の芽を発芽させるきっかけとなる。単発の体験活動の他に、継続的な体験プログラムやワークショップのように自己の糧となる経験は、知識では賄うことの出来ないため貴重である。
- 「自己肯定感・自己有用感」の言葉の意味を、会員それぞれの言葉や視点で発表してもらったことで、言葉のもつ意味の幅広さを感じるとともに、子どもたちにこれらを育む大切さを確認することができたと思う。

- 自己肯定感、自己有用感のどちらも、幼少期から今までの経験や体験によって受けた感情と、昔と現代の環境の要因の違いによるものが共通しているものがあると感じた。
- 得意なことも見つけにくく、自己肯定感、自己有用感も見つけにくい環境で怒られても、すべて個人で受け止めてしまい、心のダメージが大きいと感じ、この積み重ねが自己肯定感、自己有用感の低さに繋がっていると感じた。

- 失敗しても保証してくれる存在の人がいて、失敗したら何か違うことに変えればよいなどの心が安心できるような環境を整えることが大事だと感じた。
- 子どもが自分で考えて何度も失敗できる事業や場所の提供をすることが、子どもたちの自己肯定感を高めることができるのではないかと考える。

②自己肯定感・自己有用感についての話を聞こう！！

自己肯定感や自己有用感について、なんとなく分かってきた気が…

→でも、もっと知りたい、もっと学んでみたい！！

→講師の先生から話を聞いてみよう！！

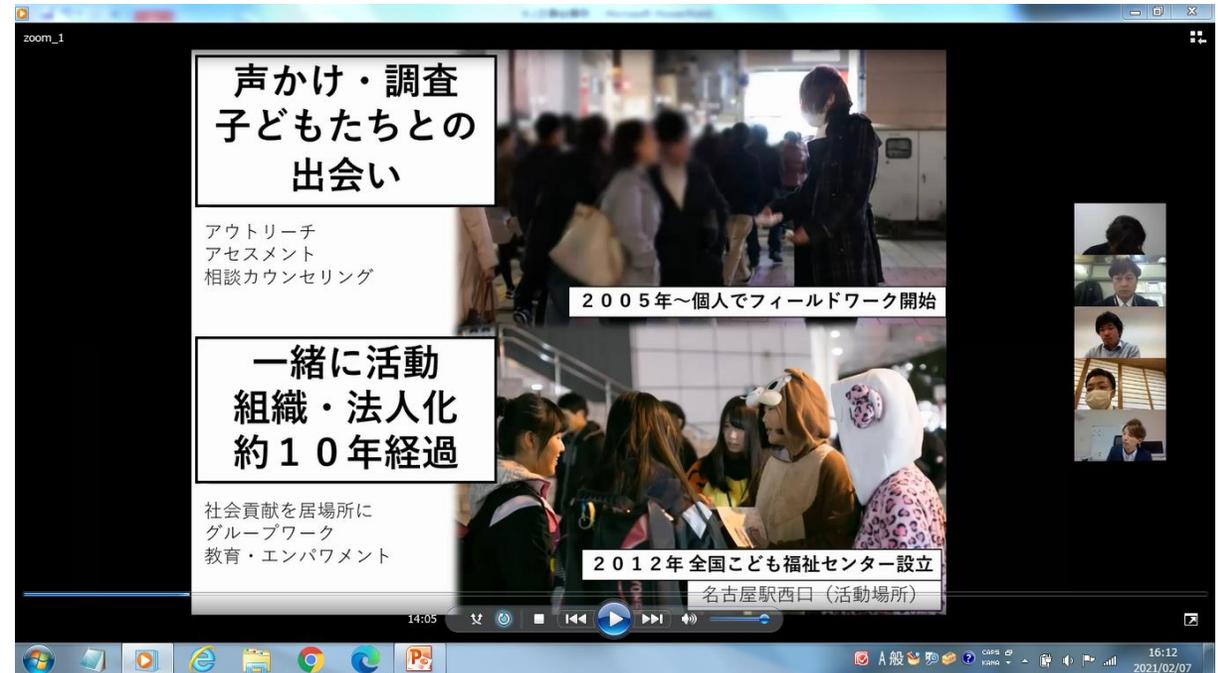
⇒全国こども福祉センター理事長 荒井氏
(羽幌町出身)に講演を依頼

講演

「子どもたちの自己肯定感を高めるために」

講師：全国こども福祉センター理事長 荒井和樹氏

令和2年11月18日 オンライン会議ツールZoomを使用



講演

「子どもたちの自己肯定感を高めるために」 感想

- ・ 荒井氏は高校時代にジュニアリーダーコース等に参加しており、そのきっかけは小中学生時代にも似たような経験があったからだと話していた。留萌管内全域でなくても、近隣市町村で連携した取り組み等はできないだろうかと考えた。
- ・ 思いっきり打ち込めるもの、自分が好きなことに打ち込むこうした体験が、自己肯定感をささえているし、当事者として参加してもらおう回路を準備することが必要なように思う。

- 駅前での活動は、地道な活動であるが着実に子供たちにメッセージを送ることができる活動であると認識した。留萌管内においても生活保護まではいかなくてもボーダーラインに近い子供たちがいると思う。その子どもたちとどう向き合って、どう差しのべていけるか考えさせられた。
- 主事会で、お互いの悩みを打ち明ける場（キャンプなど）を設け、お互いの悩みを初めて会った子にぶつけ合ったりするという企画があってもいいのかな、と思った。知らない者同士だからこそ話せることもあるのかなと思う。

- ・講演を聴いて「実践する・一緒に考える」という言葉が非常に多く出てきた印象を受けた。実践しなければ何も始まらない。一緒に考える→実践→その結果を一緒に考えて改善してまた実践する。アウトリーチで手を差し伸べられた側が、手を差し伸べる側に回っており、分野が異なるが、社会教育にも繋がると思った。一人ではなく、中高生が考えて、実践して結果が失敗しても、その保証を大人がしてくれ安心できる環境が整えられていると感じた。

- ・自己有用感は1人では獲得することが出来ないため、他者の存在が必要であるが、ひと昔前に比べ、人の価値観が多様化してきている。それぞれに合わない環境に身を置いている場合、自己有用感の獲得は見込みにくい。

よって、居場所を提供してあげることが重要なのではないかと考える。この居場所というのが社会教育でいうところの『体験学習』という場の提供なのではないかと個人的に思っている。得意なことや不得意なことはそれぞれ違うので、多様な事業を計画して色々な子どもたちに寄り添う事が出来れば理想なのではないかと思った。

- ・荒井氏の実践は、教育や福祉からこぼれ落ちてしまった子どもたちを扱ったものであったが、**自己肯定感を育む原点を感じることができた。**

荒井氏が関わった子どもたちが、「自分が苦しかったからこそ、同じような境遇の子どもを助けたい」と行動を起こせたのは、**信頼できる大人に出会い、安心できる場所で得た仲間の影響が大きかったのでは**と思った。

生まれ育った環境によらず、子どもの価値観を揺るがす体験が、その後の人生の軸になり得る。社会から荒井氏が幼少期のジュニアリーダー研修から影響を受けたように。社会教育は、子どもたちの価値観を揺るがす体験や、学校だけじゃない信頼できる大人と関わる機会の提供、学校以外の仲間を生み出すことができる。

令和3年度に向けて… (次年度の方向性)

研究協議や講演をとおして、自己肯定感・自己有用感に関する理解が深まった



令和3年度は
「地域の未来を担う
自己肯定感・自己有用感の高い若年層の育成」
に向けた取り組みへ

- ・高い若年層の育成

- ジュニアリーダー研修？

- ・コロナ禍では参加者を集めること自体が難しい…

- コロナ禍ではないが、令和元年度の管内ジュニアリーダーコースは参加者が少なく、中止になった経緯が…

- ・コロナ禍だからこそ、YouTubeなどの動画配信サイトを活用してはどうか

- だれがアカウントを取り、どこでアップするなど課題が…

★講演をしていただいた、全国こども福祉センター
理事長 荒井和樹氏(羽幌町出身)のお話

「子どもの頃に参加した社会教育事業がきっかけで高校時代にジュニアリーダー研修に参加。それが、今の活動にもつながっている」

→小学校高学年を対象とした事業を実施し、後々、管内ジュニアリーダーコースへの参加につなげてはどうか…

→第2の荒井氏の育成を目指そう！！

⇒結果、「地域の未来を担う自己肯定感・自己有用感の高い若年層の育成」につながるはず！！